

1

近代性と自生的近代性

Modernity and Indigenous Modernity

目次

- 1 近代性の概念と定義
- 2 近代性の成果と限界
- 3 脱近代性の登場
- 4 中世-現代-脱現代の比較表
- 5 多重代替的近代性
- 6 西欧近代性の東洋的起源
- 7 自生的近代性の概念
- 8 東学思想と自生的近代性
- 9 大巡思想と解冤相生
- 10 結論および示唆点

近代性の概念と定義

近代性(Modernity)は科学技術を世界認識の土台とし、資本と国家が結合して自然と人間を対象化し効率的に管理する生活の様態である。

ヴェーバーの合理化理論

ウェーバーは近代性を「全社会の合理化」と定義し、次のように細分化した:

- 合理的資本主義
- 合理的法-行政体系(法治国家)合
- 理的社会分化

近代性の主要な特徴

- 理性と科学が支配する世界観
- 合理性の原則と科学的根拠に基づく
- 人間中心の価値体系の確立
- 真理の絶対性と普遍性の追求

近代性の成果と限界

近代の成果

- 物質的豊かさ:過去の皇帝のような物質的豊かさの実現
- 寿命延長:30年から80年まで平均寿命の延長
- 自然克服:自然と餓死の物質的恐怖からの解放
- 合理的体系:法治国家、民主主義など合理的制度の定着

「百万年を超える人類進化の歴史の中で、近代は初めて人類を自然と餓死という物質の恐怖から脱却させ...一般市民が過去の皇帝のような物質的豊かさを享受するようになった前無後無の時期であった。」

近代の限界と危機

- 欲望の過剰:「手綱が解けた欲望」による問題の発生
- グローバル化した危機:気候変動、核脅威など人類存続の脅威
- 合理性の逆説:合理性がかえって不合理な状況を招来
- 人間疎外:科学技術と資本に従属した人間の疎外

「近代は再び人類を前代未聞の絶滅の危機に直面させ、近代に対する批判理論である脱近代性(post-modernism)理論が大いに流行するようになった。」

中世-現代-脱現代の比較

区分	中世	現代(近代)	脱現代(脱近代)
上部構造	神 中心	人間中心	生態論的パラダイム
神聖/権威	神聖の支配	理性と合理性の原則	理性中心主義の解体
真理観	神が真理	真理の絶対性と普遍性	真理の相対性、不可知性
科学	迷信と呪術	科学	科学(的真理)の不確定性
芸術観	善あるいは神が美	芸術の世俗化と自己目的性	芸術の異種性、混種性と解体
主体観	神に従属した自我	主体	相互主体性
世界観	生の空間	現実	シミュレーション
中心	ローマと中国中心主義	ヨーロッパ中心主義	グローバル化と地域化
疎通媒体	中心の文字	国家の文字	イメージ
社会体制	封建体制 前産業社会	資本制 産業社会	後期資本制 脱産業社会

文書<表1>中世現代脱現代の概括内容に基づく

多重近代性と代替的近代性

多重近代性(Multiple Modernity)

- 近代性は西欧だけの産物ではなく、各地域と文明圏ごとに多様な形態で発現
- 1998年学術誌『Daedalus』「early modernities」特集号で体系化
- アイゼンシュタット、ウィットロック、アルナソンなど比較歴史社会学者たちの寄与

重層近代性(Multilayered Modernities)

近代性の発展段階:

- 原型近代性(proto modernity) – 西欧的近代性以前
- 西欧的近代性(Western modernity)
- 植民–被植民近代性(colonizing–colonized modernity)
- 地球近代性(global modernity) – 現在

代替的近代性の特徴

- 文化理論、文芸–政治批評、人類学など多様な領域で提起
- 西欧近代性の合理主義的限界を克服しようとする試み
- 統攝(統攝)モデル–聖(聖)と俗(俗)の境界の転換
- 「統攝1」:聖(聖)が俗(俗)を統攝
- 「統攝2」:俗(俗)が聖(聖)を統攝

「ヨーロッパ物神主義(fetishism of European modernity)は今日代案的近代性の構築に大きな障害となる。」

代替的近代性の事例

- 中国宋の性理学に基づく近代的発展
- 日本の京都学派(京都學派)の近代性理論
- 韓国の東学思想と大巡思想

西欧近代性の東洋的起源

最近の研究によれば、西欧近代性の多くの概念が東洋思想から影響を受けたり借用されたという事実が明らかにされている。

東西交流の核心的人物

マテオ・リッチ(1552-1610)

東洋の文明神と道通神を西洋に移動させた人物として、儒教経典をラテン語に翻訳しヨーロッパに伝播

ヴォルテール(1694-1778)

中国思想に魅了され、儒教的政治体制をヨーロッパのモデルとして提示、儒教の道德哲学を賞賛

近代西欧思想への影響

ルソー(1712-1778)

天賦人權説(Natural Right)が当時中国で研究されていた概念から影響を受けた

アダム・スミス(1723-1790)

「見えざる手(*invisible hand*)」概念もまた、東洋思想から着想して開発されたものとして研究される

東洋が西欧近代性に及ぼした影響

- ・啓蒙主義期のヨーロッパの「中国熱風」－儒教思想が宗教戦争で分裂したヨーロッパに代案を提示
- ・科举制のような能力主義制度－身分ではなく能力中心の社会秩序モデル
- ・世俗化された合理的伝統－宗教なしにも道德的な中国社会がヨーロッパに投じた話題
- ・西洋が東洋を前近代的と評価したのは、植民地支配正当化の過程で始まった

自生的近代性の概念

自生的近代性(Autogenous Modernity)とは、我々の伝統に近代性があり、西洋の近代性に対して我々の伝統を活かした近代性があったという概念である。

自生的近代性の特徴

- 西欧の模倣ではなく伝統内部での発展
- 同時に近代性と脱近代性の特性を含む
- 圧縮的に近代と脱近代を構築
- 相関的思惟とリミナリティの強
- 調 西欧外部の「外の思惟」の活用

自生的近代性の事例

東学思想

「宇宙の原理が身体に備わっているゆえに民心が即ち天心」という内在的超越性思想

大巡思想

東西洋思想を総合した解冤相生の近代性概念、人類絶滅の危機の予見

京都学派と汪暉

日本と中国の自生的近代性の試み

「西洋で求める脱近代性より、西欧以外の地域に現れる自生的近代性が代案的近代性としてより適合しうる。」

東学思想と自生的近代性

東学は朝鮮後期に崔濟愚が創始した思想で、「宇宙の原理が身体に備わっているゆえに民心が即ち天心」という思想に基づく東洋の自生的近代性を代表する。

東学の哲学的意味

- 国民国家概念の初登場
- 東洋内在性思想の実現
- 韓国の自生的近代性の発現
- 単なる抵抗運動ではなく哲学的・文明史的革新

相関的思惟の特徴

- 全体的、生成的論理の重視
- 西洋の分析的思惟との対比
- 集団主義、共感の倫理的基盤
- リミナリティ(境界越え)を通じた変革

東学の近代性の特性

東学は西欧的近代性と異なり、伝統内部から自生的に発生した近代性であり、西欧近代性と脱近代性の特性を同時に有する。これは韓国の歴史的文化的脈絡から形成された独特な近代性モデルを提示する。

結論および示唆点

自生的近代性の現代的意義

西欧中心の近代性がもたらした文明的危機の状況において、東学大巡思想が提示する自生的近代性は韓国思想の独創的寄与であり、地球的問題解決の代案となりうる。

主な示唆点

- 1 近代性概念の再定立
西欧中心の合理性概念を超え、東西洋統合的視角から近代性を再解釈
- 2 相関的思惟の価値
分析的思惟から脱し、全体論的で関係的な思惟方式の復権
- 3 聖(聖)と俗(俗)の統攝
世俗化と宗教化の新たな均衡を通じた社会的文化的解法の提示
- 4 東西文明の融合
東学と大巡思想が提示する東西思想の創意的融合可能性
- 5 解冤相生の実践的価値
葛藤と対立を超えた和解と調和の文明論的ビジョンの提供
- 6 今後の研究課題
自生的近代性の現代的適用方案と世界史的位置の樹立

「東学思想と大巡思想が提示した自生的近代性は、西欧中心の近代性の限界を超え、東西洋思想の長所を統合する代案的文明モデルとして再評価されるべきである。」